

和平探るビルマ民族紛争 「武器よさらば」いつ?

経済政策の破綻による貧困。度重なる人権弾圧。民主化への遠い道のり。そして40年以上続く国内の民族紛争。ビルマはあえいでいる。国内の経済再建のため軍事政権、国家法秩序回復評議会(SLOROC)は、反政府闘争を続ける少数民族組織と和平へ向けて話し合いを進める立場を取り始めた。一八日(一九九四年一月)再開の新憲法制定のための国民議会の成り行きによつては、世界で最も古い地域紛争に解決の兆しが見られるかもしれない。

少数民族の不信深く 「戦わねば抹殺される」

昨年五月(一九九三年)から今年初めまで三度にわたり、計五ヶ月を、ビルマ反政府組織の司令部があるカレン族の中で過ごした。

「明日にでも武器を置いて戦いはやめたいのです。それが私たちの心からの願いです」。カレン軍第二〇大隊が支配する最前線基地で、トウ

・ラ・ワー司令官は静かに語った。「私たちは好戦的なテロリストでも、排外的な民族主義者でもありません。平和な暮らしを願う山岳民族です。ただ、私たちが抵抗をやめれば、ビルマ軍はカレン族を抹殺してしまふでしょう。カレン族にタイする暴行、略奪の事実を見てください。歴史がすべてを物語っています」

昨年末から始まった政府と反政府組織の中心、カレン族との和平に向けての交渉は、政治的な駆け引きの段階に入った。反政府組織の連合体、ビルマ民主同盟(DAB、一七団体)としての交渉 全政治犯の釈放 交渉過程を報道陣に公開 第三国による調停 国外での交渉一がカレン族にとつて交渉のテーブルにづく前提条件である。

昨年夏、反政府組織のなかで最大の力チン族が、政府と部分的ながら単独で和平協定を結び、DABの結束に亀裂が生じた。軍事的にも、経済的にも追いつめられたカレン族が和平へ進むと、四十五年に及ぶ紛争に終止符が打たれる。

政府側は、反政府の各民族を分断

する政策からDABとの交渉は避けたい。一方カレン族側は各少数民族による反政府統一戦線を掲げたいため、DABとしての交渉を譲れない。現在、最も重要なこの条件をめぐっての攻防が続いている。

昨年十二月に選出されたDABの五団体による代表から、ビルマ人学生の組織が抜け落ちた。これ以上の戦闘を避けたいカレン族側は、その多数を占めるビルマ人を含めたDABではなく、少数民族の組織、民族民主戦線(NDF)として交渉に入る可能性をも探っている。

タイ、ビルマ、ラオス、中国と結んだ四力国貿易圏を作り出したい対政府は、ビルマ国境にある紛争地帯に圧力をかけ始めた。タイ側に逃れていたモン族、カレニー族の難民たちは、タイ政府によつてビルマ側へ追い返され、ビルマ政府との和平交渉を強いられている。国境では五万人ものカレン族が難民生活をおくっている。タイ政府によつて、彼らもいつ、ビルマ側へ追い返れるかも知れない。

歴史的にタイ・ビルマ国境韓の緩衝地帯であったカレン支配地域に

は、新しい経済圏をまくるむタイの利権業者たちが押し寄せている。毎朝、まだ夜も明けぬうちから、タイ国旗を掲げたボートがチーク材を満載して、サルウィン河とモエ（イ）河を往来、牛をぎつしり積んだボートがタイ国境へ向かっている。

国境貿易の利益失う 軍事的圧力かける政府

カレン族は、ビルマ政府が国を開放したため、国境貿易から得ていたばかり大な利益を失った。今はタイの業者にも足元を見られ、良質のチーク材一トン当たり二千〜三千バーツという、国際価格の一割にも満たない価格で取り引きせざるを得ない状況に陥った。チーク材伐採が終わった後、カレン族の土地が水没してしまふダム建設の計画も、既に進められている。

昨年、ビルマ政府は十億ドル以上の武器を中国から買い入れた。そして、カチン族に向けていた軍を和平協定後、カレン族の支配地域に移動させ、軍事的圧力で和平交渉のシナリオを有利に進めようとしている。

カレン族をはじめ辺境民族の生存への脅威がなくなる保障は、果たしてあるのだろうか。

△写真キャプション▽

・兵站基地・ティムタ近くの山岳地で、前線への輸送船を待つカレン軍の若い兵士たち。

・カレン民族は、女性もパイプタバコを数週間がある。子供も五、六歳になると吸い始める。

・象に乗る少年たち。大切な輸送手段であるゾウに、遊びでは乗せてもらえない。荷物運びの仕事に向かうところ。